《研究論文》

職能成長を促す校長の指導助言機能についての一考察

—道徳教育の授業研究を中心に据えた校内研修を通して—

兵庫教育大学大学院連合院生　**富久　國夫**

ABSTRACT

A Study of the Advisory Leadership Function of the School Principal to Support the Professional Growth of Teachers：In School-Based Training Focused Mainly on Lesson Study of Moral Education

Kunio TOMIHISA

Joint Graduate School, Hyogo University of Teacher Education

The purpose of this study is to clarify that the school principal is expected to have the ability to provide an appropriate advisory leadership based on a sound view of teaching and educational theory that can cope practically and realistically to improve teaching in school-based training, particularly in lesson study.

Here, I attempt to verify the advisory leadership function of the principal on lesson study of moral education, which is one of the major factors of the professional growth research through case studies of the school-based training in B-prefecture from a viewpoint of research by several American researchers.

Teachers who participate in lesson study see themselves as contributing to the development of knowledge about teaching as well as to their own professional growth. The lesson study is based on a long-term continuous and gradual improvement, and focuses on the direct improvement of teaching in context and maintains a constant focus on student learning.

In conclusion, through the knowledge developed and shared with colleagues, and through the gradual improvement of daily classroom lessons by the benefits of an effective lesson study, the lesson study system can make full use of the principal's leadership function and enables the gradual improvement of teachers and teaching.

1　問題の所在と研究の目的，方法

今，わが国では，低学力問題や子どもの逸脱行動のための「心の教育」の充実とあわせて指導力の不足した教師などの問題が大きく取り上げられている。実態としては，学校の教育的指導機能の減退が進行していると指摘されている。その背景の一つには，校長が十分指導力を発揮していないことも考えられる。これらの情勢から，一見自明のようにみえる校長の指導助言による教師の職能成長にあらためて研究課題として着目することは，緊要なことであると考える。

(1) 研究の目的

校長機能として，岡東(1994)は，校長が支持的で，教師の職能成長を促進させるような「教育的指導」が，健全な風土を醸成し，教師のモラールを高め，有効な革新を成功させ，子どもの学力にも肯定的に作用している[1]，と指摘している。

今日の時点で，校長の指導助言，授業研究や職能成長など基礎的，一般的な研究については，国内でかなり見られる。たとえば，露口(2000)は，「校長の変革的リーダーシップ」は「学校成果」に対しても非常に強い影響を及ぼしていると述べ，「校長の学習理論による総合的学習への指導」[2]を論文のなかで紹介している。しかし，具体的な理論構築による総合的学習ついては，論及していない。校長自らが校内研修において，教育実践へ教育論や評価などを具体的に応用し，教師に対して指導助言を行った成果に焦点をあてた先行研究は，あまり見あたらない。

そこで，教師の職能成長に対する，とりわけ授業研究における校長の指導助言機能発揮に着目し，これを研究対象とした。授業研究のなかで，職能成長を促すため校長がどのように指導助言機能を発揮しているか，とくに校長が授業経営に教育論を導入し，それを教師の授業実践にどのように生かしているかは，極めて興味深い課題である。本研究推進にあたっては，道徳教育を取り上げた。なぜなら，すべての教師に共通な取り組みが課せられており，かつて担任として実践の経験をもつ校長の指導助言を研究するのに適していると考えたからである。なお，「道徳教育」は基礎教科のように，指導すればするほど，学べば学ぶほど，そして学年が進むにつれて学力がつくというようなものではないであろう。また，教える側の教師自身の徳性の問題もあり，教科教育と異なる複雑な側面も加味しながら，今日の指導力の不足した教員，低学力問題などへの対応策としても重要な課題であるととらえ，研究目的とする。

(2) 研究の方法

このことを究明するには，反社会的，非社会的な問題行動をとる多くの子どもをかかえている社会において，効率的で競争的な組織を導入し，卓越(high quality)した教師により優秀な子どもを育成しようとしてきた米国の場合と，学校教育の方向性に違いが見られるが，組織の弾力化により個性を伸ばすことを課題としてきた日本に視点をあて，両国の学校教育を比較検討するとわかりやすいと考えた。 21世紀の米国の道徳教育や授業改善の構想とその成果を授業研究のなかで援用する意義を見出し，また日本の授業研究のあり方を見つめ直したい。そのためB県参与観察校の道徳教育の授業研究のなかで，教師の職能成長に関する取り組みを通して研究を推進する。

なお，道徳教育改善のための授業研究の過程において求められる校長の指導助言機能の要素を明確にすることが，分析的に研究を進めるうえで必要である。授業研究における校長の指導助言機能発揮による教師の職能成長の確認には，「仮説」の有効性を検証することが不可欠と考える。そこで，次のような３つの要素が必要であるとの仮説を設定した。

① 道徳教育論，評価論。これらは，校内研修において，教師の道徳学習の改善を促し，教師に専門的知識，技能を身につけさせ，教科学習指導の課題にも対応する実際的方法を創造する。

② 道徳教育や人権教育についての教育観，道徳学習の授業観や教材観などの見識。校長のこのような見識が教師に理解されると，教師は校長に実質的な指導助言を求めるようになり，自己啓発し，自らの徳性の涵養や子ども観に基づき，子どもの人格の陶冶に努力する。

③ 先行研究の知見(リードラーナー "lead learner"としての校長のリーダーシップ論，米国のキャラクターエデュケーションの考えなど)。校長がその知見を援用するスタンスは，教師に知的刺激を与え授業改善への探究心を育成する。

これらの仮説は，重要な職能成長を促す校長の指導助言機能の要素であることを研究授業や授業研究の参与観察を通して検証する。

2. 米国の道徳教育（キャラクターエデュケーション）と授業研究への構想

道徳教育に関して，B.クラジェウスキーら(1999)は，「今日の世界で，若者は人生における価値や重要なことを見出すことに困惑している。大人による否定的な矛盾した行動，若者に与える大人の不注意，そしてメディアで報道される内容に道徳的な配慮の欠如などがある。若者の行動や人格は大人によって影響を受けている。若者は強く生きる模範を求め，必要としている。もし彼らが価値あるものを大人のなかに見出せなければ，他の場所を探し，そして仲間のさそいやメディアによって彼らの行動は影響を受けるであろう」と警鐘している。そして，「米国本来の教育において，道徳教育は倫理，価値，人間的な成長を指導することである」[3]と定義し，道徳教育の重要性を述べている。

(1) クラジェウスキーらによるキャラクターエデュケーションの構え

クラジェウスキーらによれば，道徳教育の目標は，若者が何事にも関心をもつこと，そして公平，正直，親切，尊敬の念と責任のような核となる倫理的価値に基づいて行動ができるよう支援することである[4]。教師が愛，敬意と適切な行動を勇気づけ，悪い行動を毅然として正す姿勢をもって生徒に対応するとき生徒も教師に応える。その他，核となる価値として，同情，自己修養，不屈，譲歩，希望，誠実，勇気，真心，真実，友情，忠誠，信頼など[5]，をあげている。

S.S.ヒンクら(1999)は，道徳教育推進に関して，奉仕学習（service learning）と人格形成の間の関係，奉仕学習による生徒の個人的な学力向上への影響，また生徒個人や相互間の発展に奉仕学習の経験が及ぼす影響などの調査を行っており[6]，そして，今や奉仕学習は教育改革におけるキーストーンの一つとして認識されている。現在の関心は，奉仕学習，人格形成と学業成就の間の相互関係に向いている[7]，と解説している。

(2) ルウィスによる授業改善をめざす授業研究のとらえ方

一方，日本の授業研究の米国研究者であるC.Cルウィス(2002)は，道徳教育推進にも関わりがあると思われる授業研究改善の必要性を説いている。授業研究の背景として，「米国の教師は，授業改善研究の時間がほとんどなく，多くの教材を扱うように求められている。しかし，日本では，授業研究に十分時間をかけ，教室授業のなかで，簡明な学習指導要領を基準とした小さな目標をかかげ，授業が展開されている現状にある」[8]と説明している。また，ルウィスは，ニュージャージー州のパターソン公立学校ナンバー２で授業研究を取り入れたL.リプタク校長の考えや実績を下記のように紹介している。「ナンバー２学校の授業成長（学力向上など）は，たぶんリプタク校長の"学びの精神"learner shipの部分に置かれている。そして，授業研究において，校長の主要な仕事は"学ぶこと"であり，教師が学ぶことを助けることである。リプタク校長は，授業研究において，米国で要求されている校長の強力な指導的なリーダー（instructional leader)より学ぶ者のリーダー（lead learner)であることが望ましいとの考えをもっている」[9]。

筆者には，リプタク校長のビジョン形成の力量は，従来の校長機能の価値とちがって見えにくい「価値」と考えられる。リプタク校長の考えは，教師の授業研究の活性化，授業改善，そして職能成長につながる斬新的なアイディア「価値」であり，日本の授業研究においても，この"学びの精神"をもち学ぶ者のリーダーである校長の指導助言機能は，教科教育や道徳教育への教師の学びを支援する意義ある指導助言のあり方の一つの示唆と受け取れる。

3 Ｂ県公立Ｂ小学校の授業研究における校長の指導助言

以上のような米国の道徳教育や授業研究の構えや実践を視点として，Ｂ県公立学校の校内研修のなかで，校長が教師の職能成長を促すため，仮説に設定した①～③の指導助言機能の要素を直接発揮して，指導助言にあたっているかを確認する。

(1) 事例校選定のための予備調査

そこで，研究を進めるにあたって2003年4月の時点で，校内研修を充実させているＢ県Ｔ市の小・中学校（12校）は，教育委員会などから，校長が校内研修で指導性を発揮し，成果をあげているとの情報を得た。そして，それらの学校の訪問(2003年4月～2004年11月）を実施した。訪問回数(5～15回)は学校の事情により異なる。それぞれの学校の校内研修における授業研究のなかで，筆者による校長言動の直接観察，授業研究後の校長や教師へのインタビューによって，Ａ小学校とＢ小学校は，校内研修（とくに授業研究）において，校長はラーナーシップ(learner ship)をもち，教師のリードラーナー（lead learner)として，教育課題に対応する斬新的で，特徴ある教師への指導助言関係が見られた。Ａ小学校においては，校長は教科指導を通して「生きる力」の形成を目指し，教授・学習過程で学習理論導入などにより，とくに算数科を中心とした「基礎・基本」の学力形成を図っている。本論では，とくに道徳教育の指導力向上のための職能成長を成功裡に促進させているＢ小学校を事例として，13回の参与観察を実施した。その結果を整理し，道徳教育における校長の指導助言機能発揮による教師の職能成長について考究する。

(2) 道徳教育に対する校長の指導助言の構え

Ｂ小学校（教職員数16, 児童数243, 学級数9「2004年 4月1日現在」）は，住宅地と農村地帯が混在するなかにあり，その地域社会は学校へ比較的協力的である。校長（53才，男，教育委員会人権教育課長経験，大学院修士課程で教育方法を学ぶ）は，とくに人権教育の学習指導に研究実績がある。

校長はインタビューのなかで，「道徳教育の大切さを十分認識しながらも，道徳学習を通して道徳的価値の内面化をはかり，子どもの道徳的実践への意思決定や意思決定力を養う指導が可能であるのか。また，効果的な期待が難しい道徳は教えられるのかなどについて，教師自らの徳性を鑑みて，謙虚に自分に問うてみなければならない。子どもの道徳性を高めるためには，まず，指導する側の教師の道徳的な高まりが必要である。人間としての弱さを自覚しながらも，目の前にいる子どものよりよく生きようとする思いや願いを受けとめ，主体的に生きる力を支援できる身近にいる人生の先輩としての役割はたいへん重要である。子どもとともに，教師の道徳性を高める研修の充実が不可欠であり，そこから道徳教育は始まるのである。これらのことを共通理解することに努め，指導助言の基本的な構えとしている。」と述べている。

1) Ｂ校校長の道徳教育論から教師による実践へ

また，Ｂ校校長は，「道徳の授業は見る以上に困難であり，指導方法の専門性が不可欠であり，多くの経験を積まなければならない。教師のメタ認知(meta cognition)と自己の徳性や学習指導に対する批判的思考(critical thinking)の訓練を通して道徳教育論の理解，授業改善，教師とのビジョンの共有など，そのための研修が必要である。授業研究は教師の力量形成の場であり，教育論を実践に結びつける場でもある。」との理念をもっている。世界的視野にたち，日本の道徳教育を考えている押谷(2002)は，道徳教育は純粋に教育論だけで考えられるものでなく，道徳教育こそ，学際的研究や取り組みが求められるものである，[10]と述べている。校長は，この考えを授業経営に生かそうとしている。さらに，Ｂ校の道徳教育を深めるため，日本と米国の道徳教育をより理解するため，校内研修で同県にある大学よりキャラクターエデュケーションについて学び，米国のNASSPの論文などを研修に活用している。

Ｂ校の校長は，E.F.シャファー (1999)が，キャラクターエデュケーションについて，「道徳教育は，倫理的な徳のある人々へ成長させるに必要な情報と技能を国家の若者に提供する」[11]そして，

「私たちの社会が必要とする価値を教え，子どもたちは，価値について学ぶだけでなく，価値を内面化し，そして意思決定しそれらに従って，行動する。そのために，学校の教育課程と文化を通して価値に焦点をあてることが要求されている」[12] と述べていることを説明し，価値の内面化とそれによる行動について授業研究を進めている。また，校長は日米の文化的背景の違いを認識したうえで，米国の道徳教育の目的は，公平，正直，同情，責任，様々な知識，他人に奉仕すること，自己と他者への尊敬などが核となる倫理的価値に基づいての行動を支援することであるとの認識をもっている。これらの道徳教育論の研究を通し，授業研究のなかで，米国と日本，そしてＢ校の道徳教育の目標と基本的に共通していることを確認しながら，広い視野にたった指導助言も行っている。

さらに，シャファーは「奉仕学習は，道徳教育に焦点をあてている多くの学校の最も主たる部分を占めている」[13] と説明し，ヒンクらは学校教育において，教師がすべての生徒に期待していること，そして校長の究極の目標としていることは，学業成績の向上である。多くの研究は，道徳教育における奉仕学習が生徒の成績と学校への出席に肯定的に効果を及ぼしているのである[14]，と論じている。Ｂ校校長も自己の教職経験から，ボランティア活動に積極的な児童や道徳的な思考を背景に行動できる児童は，学習成績も良くなると考えている。これらのことから，学校教育の今日的な低学力問題と道徳教育との関連についても深い関心をもち，校内研修の研究課題としている。

押谷は，「アメリカとイギリスの学校教育において，子どもたちの逸脱行動や学力低下に悩まされている。それは，国家の危機であるという認識のもとに，道徳教育の充実に努めている」[15]，そして伴(2002)は，「学業成績は，われわれが設定した社会＝道徳的行動の指標と最も密接に関連していた。この結果は，教育の質を高めるためには基本的社会態度を培うことが欠かせないとするアメリカのキャラクターエデュケーションの提言に合致する」と述べ，さらに「1980年代初期からアメリカで実験的に試みられてきた数々の教育改革の後に，人々は学業成績をあげる上で品性陶冶が鍵を握ることに改めて気づいてきたのである」[16] と解説している。筆者もＢ校校長の考えと同じく，道徳学習を充実させることは，教科学習などの学力向上につながり，また必然的に教科学習を通しての知育そのものに徳育が分かちがたく内在しており，知育は徳育の基礎であるととらえている。すなわち，徳育と知育は切り離せない相互関係にあると考えられる。

以下，道徳教育論を基盤にした研究授業，授業研究の観察を通し，その内容を分析し検証する。

２） 研究授業と授業研究の参与観察における校長の指導助言事例（６年道徳「本時の主題名」学校をよりよくするのはだれ？）「授業実施日2004年６月17日」

学習指導案(略)

上記主題のような研究授業を行ない，その後授業研究を実施している。文学作品を活用した授業について校長は，「子どもが価値を内面的に自覚するには，資料での共感的な追及をさせる。道徳の時間の中心的な資料は，たとえば，道徳的行為などの前提となる場面→迷い，悩み心が揺れる場面→葛藤する場面，価値を志向する場面→満足したり後悔したりする場面など，読み物資料に多く見られる流れの例である。このような資料での人物への共感的な追求を軸として，迷い，葛藤し，感動したり行為について検討したりする活動を通して，内面的な自覚が図られていく。」と指導助言を与えた。

今日の文学教材（資料名，きえた紙くず）による授業の核心は，“きれいになるまで拾えばいいよ，みんなが捨てたら，どんどん拾えばいいがな。”である。そこで，校長から「たけしから

こういう言葉がなぜでるか。どうして続けられるか。何のためにやっているのか。」と教師へ投げかけがあった。 そして，次のように校長は，「こだわらない無の境地，無心になっている，だから続けられる。自分自身のために取り組んでいるたけしの心には，過去に経験した何かがあるのであろう。無心，無欲の心（相対的に評価できないもの）からの行為につながっている。子どもたちからこのような意見が出なくとも，これにかわる言葉が出てくるものである。」と自己の授業観を述べた。そして，校長から授業者にそのような言葉に気づいたか。それはどのような言葉で表現されていたかの質問があった。

研究授業者らから，「授業研究のなかで，校長は一方的に指導助言をするのでなく，共に学ぼうとする姿勢をもつリーダーとして，助言にあたっている。また，授業参観者（同校の教師）や，とくに授業者によく質問をする。質問は授業の本質をついており，即答することが困難な局面がよくある。しかし，授業改善の課題として，自己啓発につながる。」との声があった。

次に教材（資料）の読みとりについて，次のような指導助言があった。

「文学教材の授業で（教材），子どもにどのような力をつけるために（授業の目的），何を，どのように教えるか（授業の方法）を授業者は考えなければならない。教師自身の教材解釈の深さが，子どもに反映され，読み取りができる子どもを育てることになる。そこから道徳学習が始まる。教材のうわべだけでなく，内奥にせまるには，教師自身の教材観（教材解釈の能力）につきる。その教材観が子どもの実践化につながっていくのである。」との助言があった。その後，本時の教材について，授業参観の教師たちの教材観を求め，要を得ているところを認めて，称賛し励ましていた。

教材として使用する文学作品について，バーバラ・コーウエル(2002)は，「子どもに道徳的問題について一定の本を読ませることは，他の人々の感情についての彼らの知識を増やす助けになるだろう。しかし，これはあくまで，憶測にすぎない。だから可能な限り，何が効果があり，何が効果がないのか，実証しなければならない」[17]と論じている。

校長とのインタビュー（2004年7月8日）のなかで，校長は文学作品の資料などを使った道徳学習の評価は，新たに教師自身の実践を変容させ，職能成長につながると述べている。そのために，次のような道徳教育評価表などを活用して道徳教育による効果の有無の実証を試みている。

道徳教育評価表

表1　学校全体での指導計画

評価者：校長，教員，（外部関係者）

評価項目	評価観点
全体計画	ア　校長を中心とした全教師の参加・協力の下に指導体制・研修体制ができているか。 イ　学校の道徳教育目標と重点目標を十分に考慮し，道徳の時間をかなめとして，各教科，特別活動，総合的な学習の時間などが有機的なつながりをもって指導できるよう計画されているか。 ウ　保護者や地域の人々の参加や協力について，具体的な方針や手だてが明確にされ，計画的に行われるようになっているか。 エ　社会体験活動や自然体験活動，交流活動などが計画的になされるよう協力体制等が明確になっているか。 オ　人間関係の充実や道徳教育に資する環境整備の具体的な方針や計画が明確にされているか。 カ　必要に応じて計画が改善される用意と工夫がなされているか。
年間指導計画	ア　全体計画との関連を十分考えて作成されているか。 イ　重点的な指導，複数回取り上げる内容項目の指導，豊かな体験や他の教育活動と密接な関連をもたせた指導などについて工夫され，具体的に計画されているか。 ウ　1年間，学年段階，6年間を通して，計画的・発展的・調和的に内容項目の指導がなされるようになっているか。 エ　年間を通して，多様な授業が展開できるようになっているか。 オ　個々の主題について，「ねらい」「資料」「展開の大要」「他の教育活動との関連」などが適切か。 カ　校長や教頭の参加，他の教師との協力的な指導，保護者や地域の人々の参加や協力などについて，具体的に計画されているか。 キ　研修計画が明確になっているか。
学級における指導計画	ア　焦点が絞られ，具体的に活用できるものになっているか。 イ　全体を見て，豊かな心をはぐくんでいる日々の学級や授業の様子を具体的に描くことができるか。 ウ　重点目標に関して，豊かな体験や他の教育活動との関連をもたせた指導が具体的に計画されているか。 エ　家庭や地域社会との連携について具体的に工夫されているか。 オ　実践を踏まえて修正し，質を高めていく柔軟性のある計画になっているか。

表2　道徳の時間の指導

評価者：校長，教員，（外部関係者）

評価項目	評価観点
指導の過程	ア　児童の心の動きを十分に把握し，道徳的価値の自覚を深められるよう適切に構成されていたか。また，指導の手だては適切であったか。 イ　発問は，意図に照らして的確になされていたか。 ウ　児童の一つ一つの発言に耳を傾け，その背後にある気持ちを受け止めようとしていたか。また，自らも心を開き，心のふれあいのある授業になっていたか。 エ　特に配慮を要する児童に適切に対応していたか。 オ　板書は適切であったか。
指導の諸方法	ア　ねらいを達成する上で適切な方法であったか。 イ　児童の実態や発達段階にふさわしいものであったか。 ウ　児童一人一人が，問題意識をもって自発的に課題に取り組み，積極的に学習に参加するような配慮がなされていたか。 エ　児童の内面により深くふれる方法が工夫されていたか。 オ　児童は道徳の時間を楽しみにしていたか。 カ　学習活動に集中していたか。 キ　新たに学んだことや気付いたこと，これからしようと思うことなどが生まれてきたか。 ク・その時間の終わりを惜しむようであったか。
その他（感想・意見等）	

3） 授業研究における校長の指導助言のあり方

指導助言のあり方として，卓越した主任層のベテラン教師は１時間の授業展開を中心に授業方法論などの指導助言機能を発揮している。それに加えて，Ｂ校校長は，校長のリーダーシップは，権威，立場でなく機能であるとの認識のもとに，授業が成立する条件整備，すなわち校内の実態に即した道徳教育の独自的なカリキュラムの創造，学校教育目標と校内研修の研修主題との関連，評価などを加味した指導助言を行なっている。この指導助言のあり方はＢ校校長の校長たる所以であろう。Ｂ校校長の指導助言は，とくに授業が見える教師を育て，子どもに対し道徳的価値の内面化をはかり，道徳的実践力を育むための道徳教育を教師に理解させることに焦点をあてている。

たとえば，Ｃ教諭は「校長が，道徳学習の資料（すれちがい）を利用する５年生の学習指導案（主題：相手の立場を考えて）を検討し，『資料には崇高な理念が示されているから道徳的価値を深めていく意味がある。葛藤，難しさ故に価値がある。そこから自分はどう生きるかにつなげていくのである。授業を行う事前研究で視点を明確にしておくと更によい』との助言を受け，子どもの発言に関しては，『子ども同志のキャッチボールであり，主題について教師がボールを投げる。話し合いが続くため，発言した子どもが次の子どもを指名する。自分の意見をどう思うか。当てっこする。一人の発言に聞く耳をもたせる教師の発問の訓練が必要であり，教師が調整者になることが望まれる』などの助言を受けた。」と述べ，また同教諭は「子どもの意見から，子どもの思考パターンを充分認識できる能力が必要である。アカデミックな面と実践による経験からの研修が必要であるとの考えにいたった。そして，話し合いを続け，聞き合うことのできる工夫や環境づくり，学級経営との関わりのなかで，たとえば主題の授業について言えば，すれちがいや過ちはだれにでもあることを理解させ，その時どういう心で相手に接していけばよいかを考えさせ，興味をもって授業に臨む子どもを育てていきたい。校長の指導助言には学問的に，また理論的に納得させる深い教育的なリーダーシップを感じる。」と評していた。教師を納得させる校長の助言機能は，研究授業で見られる教授・学習過程の発問などに有効に働いていると考えられる。

4 考　　察

(1) 校長の指導助言機能の要素の検討

仮説①について，Ｂ校研究紀要(2004)などから「○道徳的価値の内面化と道徳的実践力を高めるための学校づくりが芽生えている。○教師は道徳学習の楽しさを体験させ教科学習への意欲も高めている。」などが見うけられる。

Ｂ校校長の道徳教育論応用の試みにより，教師は教育論を実践に生かす取り組みのなかで，教授・学習過程を明らかにし，その過程において教師の効果的な発問などで，子どもが意欲的に学習を進めていることが，研究授業観察のなかで見られる。一例として，米国の道徳教育論，日本の道徳教育における価値の内面的自覚，主体的な道徳的実践力などに関しての指導助言について，同校の研修主任から「米国の道徳教育論などのアカデミックな内容もわかりやすく咀嚼し，日常の道徳学習に参考になるよう助言している。そのことは教師の道徳教育観や道徳学習の授業観の確立の支援になっていると思う。校長の指導助言には説得力があり，象徴的存在で，知的刺激を与えるリーダーシップを備えている。力量のある教師像(形にとらわれず，探求の本質をしっかりもち，子どもの声を取り上げ，聞き合い，学び合う関係づくりができる教師）を教師に明確

に示そうとしている。教師は自分の授業を高めるため，自らの経験を語り，その経験を同僚に惜しみなく与え，他の人の経験や考えから価値あるものを得ようとする構えで校内研修に臨んでいる。」との報告を受けた。このように教師へのインタビューのなかからも，「校長による指導助言の有効性」が授業担当者の意識上に見られ，校長の指導助言機能の要素が有効に働いている側面ととらえている。ただ，教科教育の成果のように数量的データを把握できず，効果を確認することに難はある。

仮説②について，Ｂ校校長の道徳教育観，授業観，教材観などからの指導助言は，複雑な授業を展開する教師の信頼を得ることにつながり教師の職能成長のための自己啓発を促している。評価表，研究紀要，教師とのインタビュー，研究授業の観察などの分析からＢ校の子どもには，道徳の学習活動（発表，仲間との意見交換や話し合いなど），道徳的思考力，そして道徳的価値の内面化により，学校生活や地域社会の奉仕活動や仲間関係などにおいて道徳的実践力に上向きの変容の兆しがあらわれている。指導助言機能の要素の効果であろう。

仮説③について，校長は教師と共に学ぶという相互信頼における人間関係の確立を基本とし，校長の学ぶ者のリーダーとしての"ラーナーシップ"や米国のキャラクターエデュケーションの考えを学際的に援用する構えは，教師に信頼感と知的刺激を与えている。とくに，米国の道徳教育論から，国際的視野にたって道徳教育の本質に迫り，道徳教育の必要性を更に認識し，米国の奉仕学習（service learning）や品性陶冶などの成果（子どもの成績や学校への出席などへ肯定的に影響を与えている）の援用は，教師にとって日々の教育実践（道徳学習，教科学習など）に生かそうとする意欲につながっている。これらのことは，Ｂ校教師の授業研究のなかの発言や教師へのインタビューによってうかがわれる。そこから，前述した米国の先行研究者であるS.S.ヒンクらの道徳教育論やその成果を援用することには大きな意義があると思える。

研究授業において，参観者も授業を漠然と見るのでなく，学習教材の価値の理解，子どもと教材との関係（教材観の重視）や教師同士のつながりから学びの多様性のある学習過程をとらえる専門性が育っていることがうかがえる。授業研究においては，授業研究を授業者の反省のみでなく，授業者と参観教師が相互に授業を重ねあわせて省察する場としている。そのことが，きめ細かな道徳学習指導につながり，子どもの学習意欲を向上させる成果にもなっていることが観察される。その他，研究授業や授業研究の観察から，目標達成の資料を選ぶ能力，資料解釈，学習過程における教師の発問，教師の創造的･独自的な道徳学習指導に上向きの変容の兆しも見られる。

①,②,③の仮説について，Ｂ校校長の指導助言機能の要素についての検証は，上記のように部分的に成立する。これらの仮説は，本研究においての知見として，指導助言機能を機能たらしめる構成要素としての主要な概念を析出することが可能と考えられる。

①,②,③の仮説の結果に共通なものとして，Ｂ校は校長の指導助言により，継続的な改善の構えができており，学習目標を明確にセットし，目標と指導と評価の一体化の工夫があり，また教師が学ぶことのできる場所として学校が機能している。そのなかで，Ｂ校校長の道徳教育のカリキュラム編成への指導助言は，教師の授業実践の教授・学習過程に有効に働いている。

視点を変えて見ると，校長の指導助言機能発揮が教師の職能成長を促し，そのことが校長自らの指導助言機能の力量を形成しながら，その過程において互いに変容していくという双方向的な関係にあると考えられる。故に，これらの仮説の検証により，本研究の目的である授業研究における校長の指導助言機能は，概ね教師の職能成長を促す構成要素となり得ているととらえている。

(2) 校長の指導助言機能発揮による教師の職能成長

教育効果をあげている校長は，子どもの学習を改善することに努力している教師と大きな関わりをもち，確かな授業観，教育論を基盤に教師の授業改善や子どもの学力向上を促す校内研修づくりにリーダーシップを発揮している。とくに，参与観察校Ｂ校において，校長のラーナーシップやリーダーシップによる校長の指導助言機能の究明を試みた結果から，Ｂ校校長の指導助言機能発揮による授業研究のなかで，教師は自己の職能成長を学習指導についての知識を発展させるものであるととらえ，効果的に授業改善を進めている。教師の授業改善は，授業研究のなかで継続的，漸進的な改善を基本として，学習指導の直接的な改善と子どもの学習に不断の焦点をあてている。そこから，発展させた知識を共有し，特別な場所でなく，平均的な教室授業実践や奉仕活動する地域社会のなかで，道徳教育が進められ，職能成長を可能ならしめるという成果をあげている。教師の職能成長の具体的な事例として，①児童の発言を「ほめる」から「認める」への構えが見られる。②「教え込む」から「心を揺さぶる」へ，教師も「共に育とうとする」構えができつつある。③「分からせる」から「引き出す」構えへ変容している。④資料を生かし「迷い」「葛藤」への追い込み方，児童が考えたくなる問題場面などの工夫がされている。それらの職能成長事例は，参与観察のなかで確認される。また，道徳教育の充実により教科学習意欲の発展へもつながっていることが，研究紀要のなかにも示されている。これらのことは，今日の学校教育課題の学力不足問題にも対応する指導助言機能発揮の一つのあり方を示唆しているように考えられる。

5　今後の研究課題

仮説①について，道徳教育論による学習が先行しすぎては，理論と児童の思考が乖離することが生じ，道徳的価値の内面化が図れないことも考えられる。このために地域社会，学校，児童の実態の把握が不可欠となる。価値観の多様な社会にあって，教える道徳や価値に校長も教師もとまどいをもつこともあろう。しかし，学校教育が全人教育を目指すなら，子どもの道徳性を涵養することも学校は引き受けることになる。このように教科教育の学習指導と異なる道徳教育の側面を十分認識し，校長はじめ全教師が総意を結集して道徳教育を進めなければならない。

仮説②について，道徳教育に関しては，子どもに教えるべき道徳「子どもの道徳」とは何か，またそれをいかに教えるべきか「子どもへの道徳教育」を中心にした傾向があったように思われる。道徳教育については，モデルとしての教師の姿勢が重要になる。もちろん，教科学習指導の力量と同様に，実際的な授業のなかで，とくに子どもが学習課題に葛藤し考えを発展させる方法，子どもの考えを促進させる発問などの教師の力量が極めて重要である。校内の授業研究においては，道徳教育の研究を深め，教師自らの姿勢を重視した校長の指導助言機能の発揮が望まれる。この要素を検証するには，教師の研究授業や授業研究における校長の指導助言機能発揮の状況を見すえ，教師の教授学習・過程，発問，子どもの応答，葛藤する場面や評価表の分析を通して，教師の道徳教育観，道徳学習指導の変容や子どもの学習，生活などの変容を把握することも大切である。校長の指導助言機能の要素としてより生かすには，更なる研究を必要とする。

さらに，校長の指導助言機能要素の検証の方法として，道徳教育の評価表を利用しても教科教育のように数値的，客観的に成果を確認しがたい面がある。複雑な構成から成り立つ道徳授業の

改善のため，教師の職能成長を促す指導助言機能の構成要素の概念を析出することは，本研究を深めるために大きな意義がある。しかし，析出された概念は，分析概念として，曖昧性をもつことが考えられるので，可能な範囲で吟味することが必要である。指導助言機能の構成要素に関して，理論的に整理を試みることや機能の形成とその変容の過程を検証した知見から理論的一般化を試みることも課題となる。

なお，本論の客観性，信憑性を確認するために，また他校の校内研修（とくに授業研究）において，校長が実践的にどのように指導助言機能を発揮しているかの事例的解明の研究をさらに深め，教師の職能成長の実状を把握し，論理的な整合性や厳密性の高い論文構築のために課題に迫っていきたい。

参考・引用文献

1) 岡東壽隆『スクールリーダーとしての管理職』東洋館出版社，1994年，32-39頁。

2) 露口健司「校長のリーダーシップと学校成果の関係」『日本教育経営学会紀要』42号，2000年，64-74頁。

3) Bob Krajewski, Elsie Bailey(October 1999)*Caring with Passion:The "Core" Value* , NASSP Vol.83 No.609, p.33.

4) Ibid., p.34.

5) Ibid., pp.38-39.

6) Shelly Schaefer Hinck, Mary Ellen Brandell(October 1999)*Service Learning:Facilitating Academic Learning and Character Development,* NASSP Vol. 83 No.609, p.17.

7) Ibid., pp.17-18.

8) Catherine C. Lewis(2002)*Lesson Study:A Handbook of Teacher-Led Instructional Change*, published by RBS Research for Better Schools, Inc. Philadelphia, PA, p.8.

9) Ibid., pp.76-78.

10) 押谷由夫「日本の道徳教育の特徴とこれからの方向」J．ウイルソン監修，押谷由夫，伴恒信編訳『世界の道徳教育（The Moral Education of the World)』玉川大学出版部，2002年，160-161頁。

11) Esther F.Schaeffer(October 1999)*It's Time for School To Implement Character Education*, NASSP Vol.83 No.609, P.1.

12) Ibid., pp.3-4.

13) Ibid., pp.6-7.

14) Op.cit. 6), pp 19-20.

15) 押谷由夫「外国における道徳教育の動向をふまえて」前掲書10)，207頁。

16) 伴　恒信「道徳的社会化の特質」同上書，124頁。

17) バーバラ・コーウエル「道徳的思考のための基盤形成」同上書，60-63頁。